

【とうらぶ×GS美神】胎  
児の夢【女審神者+長  
谷部&蛍丸】

駒由李

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

横ルシ前提。横島の200年後の子孫として生まれた転生ルシオラ（記憶無し）が審神者をやっている話です。GSキャラはピートぐらいいしかまともに出番がありません。タイトルは夢野久作氏の作品「ドグラ・マグラ」の中に出て来る架空の論文より。珍しく今作は書き下ろしです。

# 目次

胎児の夢

1



# 胎児の夢

20世紀末のある会話

異能は吸血鬼。しかし、昼間でも歩ける体。それに興味を持ったのは偶々だ。

「貴方は、ダンピールなのね」

「ええ、母が人間でして」

女性の問いかけには、勿論きちんと答える。イタリア男性らしい。ピートと呼ばれている青年は、笑んで答えた。嫌味のないそれには、牙が光る。今は昼下がり。太陽が空を陣取っていた。彼は、苦笑する。

「とはいつても、ほとんど吸血鬼としての人生を送っていますがね。母も疾うにありませんし」

「……私がもし、彼と結ばれたら、貴方のような子が生まれるのかしら」

何とはなしに、腹を押さえる。ヒトの形に似せているから、恐らく生まれるのはここからだ。

古来、異類婚姻など珍しくもない。あのオカルトGメンもいつていたではないか。

「彼」は成人していない。「彼」と本当に添い遂げられるのは、数年の後の事だろう。その時が、今から、とても楽しみなのだ。

けれど、この青年のように、人間の片親は先に亡くなる。それが寂しかった。特に、「彼」が傍にいなくなるのは。それに想いを馳せると、ピートは優しく笑んだ。

「まだ、先の話ですよ。ずっと、先の話です。案外、ヒトと付き合っていると、時間は長く感じるんです。それに、僕達みたいなモノの特権がありますよ」

彼はいった。

「これからの皆を、そして彼らに縁が続く人達を、ずっと見守っていられるんですから。ルシオラさん」

「……そうね、有難う」

自身は、笑った。日が、西に傾きかけている。横島は、いつ帰ってくるだろう。

2199年、その後 東京旧市街地区

不意に、それが頭に引っ掛かったのは彼らが消え去ったからだ。それにひどく後悔し

た。だから慌ててデバイスを取り出した自身に、部下が戸惑いの声を上げる。

「ブラドール大佐、どうなさったんです」

「問題ない。……忘れ物をしていただけだ」

いいながら、日本政府に交渉する。日本には戸籍制度がある。

運が良ければ、「彼」の子孫を辿れる筈だ。あっさりと了承を貰い、2000年分の「彼」の家の戸籍を取る。そこそこの料金は取られたが、構いはしない。多岐に渡るそれらを篩にかけていく。

「彼」が生きているうち、彼の子や孫、曾孫に、「彼女」が生まれる事はなかった。誰も、本人ですらそれに触れた事はない。ただ、名前の候補に、「彼女」に由来するものがあつた事を、自身は知っていた。

『彼の子供や孫に転生する可能性は高い』

しかし可能性は可能性でしかなかった。同世代の者達は密かに落胆し、「彼女」に関わる魔族も神族も、次第に離れていった。自身もオカルトGメンとなり、あれから2000年の人生を歩んでいるうち、「彼ら」とは離れてしまった。

けれど、この事件が偶然とは思えなかった。

「……あつた」

部下に見咎められないよう、眩く。

知っている中では、「彼」の家はあちこちを転々としていた。東京から大阪、ロンドン、ロシア、パリ——ばらばらになった中で、「直系」に当たる家の住所が記載されていた。「横島家」が。

2199年 九州某所

生まれた時から、ホタルは友達だった。気がつけば、日が暮ればホタルと戯れる我が子を、両親はどんな思いで見えていただろう。思い至ったのは、熱帯と化し雪が降らなくなった九州の田舎といえど、時節問わず常にホタルが付きまとうという事に気付いてからだ。名前からして悪い。これではホタルに懐かれても致し方ない。それが魔性の妖だとしても。

ホタルはいつでも、自身を守ってくれた。導いてくれた。宵闇に紛れて迷子になれば、その灯火で道を教えてくれた。迷子になった友の元に導いてくれた事もある。時に、治安の悪い時世。悪漢に大勢で群がる様に恐怖を覚えた事もある。それからは、何かがあれば、自身の幻を作って逃がしてくれた。

「先祖が異類婚姻でもしたのかね」



日が暮れて、縁側でホタルと戯れる娘に、母は不思議そうに首を傾げた。先祖はゴーストスイーパーの家系だったらしい。今はただの霊感が強い程度の体質だが、そうでもなくとも異類婚姻は珍しい話ではなかったそうだ。

しかし、ホタルとの異類婚姻とは、一体どういう経緯でそうなったのか。不思議だった。

「ICPO、オカルトGメンのブラドール大佐です」

\*\*\*\*\*

2205年 肥後国NO. ●●●●● 部隊名「横島」

着任して早々に、試してみたオール999レシピ。2番目の鍛刀でやって来たのは、あまりにも自身に縁深すぎる名を持つ刀剣男士だった。

## 胎児の夢

この景趣は、頓に気に入っているという。ゆえに、この本丸の季節は常に夏だった。今日も日が暮れると、ホタルが舞いはじめた。

その辺りから摘んだホタルブクロに、やって来た一匹のホタルを入れる。すると、その灯りは大きく点った。夜道を照らす、小さな提灯だ。それに、いつもと同じように眼を奪われる。

まぼろしの火だ。ホタルブクロに集まってきた淡い光の群れに、自身は語りかけた。「主と蛍丸のところ、連れて行ってくれないか」

すると、ホタル達はふわりと滑空する。ついていけば、ホタル達は庭の奥へと導いていく。それに、密かに嘆息した。

また、主はあの川辺にいる。近侍の蛍丸を連れているのはいい。問題は、決まって、そこにいる彼女は、いつもより深刻に落ち込んでいるという事だった。

ホタルのたまり場。故郷でも、彼女は好んでそこにいたという。それは彼女の魂の起源に由来すると、応対した客人は、深刻そうにいつていた。今日の客人は、いつもの外

つ国の青年。それに、異類の、赤毛の女性だった。

青年は、この審神者の後見人。女性は、審神者の「姉」という。青年は穏やかな雰囲気纏っていたが、女性はあまりにも重い空気を背負っていた。帰すのに、苦勞をしたらほどに。

「長谷部。有難う、お疲れ様」

「——主。蛍丸は寝ているのですか」

「うん。怒らないであげてね。遠征から帰ってきたばかりだったこの子連れてきたのは私だから」

既に暗い川辺に、足を浸けたまま座る女性。その膝には、見た目は幼気な大太刀の付喪神が寝息を立てている。そうしていれば本当にあどけない子供なのだ。戦場での鬼神ぶりは全くわからない。

それをいえば、この主はただ人にしか見えなかった——ホタルブクロを勝手に破ったホタルが、彼女の元に舞い戻る。円舞するホタルは、彼らを守っているようだ。否、実際、守っているという。蛍火に照らされる彼女は、いつもよりも憂鬱そうだ。

「それで、今日のお客様は、納得して帰ってくれた。ブラドー大佐が抑えきれなかったっていつていたけど」

「……また来る、といっていました」

彼女の髪の毛には、奇妙な癖がある。2本の細い角のように、髪の毛が立っているのだ。そこだけは、あの赤毛の女性と似ていた。

『妹』が顔を見せてくれるまでは、軍の非番の隙を見て、何度でも来ると。……ご安心を、主。俺は、主の命に従います』

「……有難う。御免ね。いつも、こんな主で」

不安そうな瞳を揺らがせたから、自身は咄嗟に答える。主は、蛍丸の頭を撫でた。

「でも、私の前世のお姉さんや妹なんて、どうしてもわからないの。それに応えようとするのに、もう疲れちゃった」

だからブラドー大佐というあの青年は、彼女を政府に引き入れたという——ICPOでも、歴史修正主義者の対応には忙しい。日本政府でも同様だ。その為の人材として、彼女を保護してくれたと、彼女自身が語った。

自身がこの部隊に着任して直ぐの事だ。妹と名乗る少女が、この本丸に乗り込んできたのは。跡を追ってきたブラドー大佐が抑えたものの、笑顔を見せていた審神者が見る間に青ざめたのは、あれがはじめてだった。

彼女の前世は、魔族——200年前、世界の命運と、恋人の為に身を擲ったホタルの化身だったという。

『体は間違いなく人間なのですが、彼女の魂は元は魔族のものです。……200年とい

う時間は、寧ろ早い方だったというべきでしょうね。1000年かけて生まれ変わった人達もいますから』

別の日、改めてやって来た彼は、そう語った。そして今の彼女があれ程に憔悴しているのは「自身が原因」だとも、彼はいつた。

「6年前に、突然やって来た大佐はね。どうしても確かめたい、つていつててね。両親と一緒にだったし、費用も向こう持ちだったけど。魂を調べさせて欲しいっていわれた。……そこから、漏れたらしくてね。200年前の私の関係者だったっていう人達が、嬉しそうな顔で、九州の実家を訪ねてくるようになったんだ。最初は、他人事だったよ」  
今の自身の境遇を振り返り、彼女は語る。ホタルが舞う。時折、自身の方にもホタルがやって来た。彼女の様子がわかる程に、その螢火は明るい。

聴けば、200年前。前世の彼女は、自身を助けて死にかけた恋人に、自身の体のパーツを分け与えるような真似をしたという。そして、彼女は散った。「破片」はかき集めても、どうしても「彼女」には足りなかった。

『でも、彼女の体の多くが残された恋人の彼が子をなせば、子供や孫に転生してくるかも知れない』

「……それが、200年も未来じゃどうしようもない。そのご先祖も、21世紀の末には死んじゃってらしいし。仮にどこかに生まれ変わっていたとしても、屹度、恋心なん

て持てないと思う」

「文字通り、命懸けの恋でしたでしょうにね」

それは、文字通り。世界を天秤に掛けた恋だったのだろう。今の彼女からは、そんな情熱は見当たらない。この女性は、既に疲れ切っていた。蛍丸の頭を撫でてやる手も、姉よりも母や祖母。そういった様子だ。

それだけで、察する。だから、長谷部は、少しだけ苦しい。あの世というものがあるならば、ついていきたかった。——もし、生まれ変わりなどがいれば、自身はどうするだろう。それを考えれば。

まだ浅い宵。さらさらと流れる川。足が冷えないのだろうか。川に浸したままの足を、蛍火が照らした。彼女の、苦笑した顔も。

「……パピリオ、っていつてたかな。あの子が妹っていうのは嬉しいよ、かわいいもん。でも、それだけ。あの子は『魔族にとって、死別も転生も本当のお別れじゃない』っていつてた」

「……そういうものです。俺達刀剣男士も、『オリジナル』がいますから。でも」  
「でも、そう。今の私は、人間なんだよ」

撫でていた手を、止める。俯く彼女は、触覚を思わせる癖毛を揺らす。

「だって、恋人だったっていう先祖は、人間だったんだから。私が魔性に由来するものだ

とわかるのは、石切丸とかにつかりとか、それにまんばとか。それぐらいだよ。長谷部だって、今でも全然わからないんでしよう」

口を噤む。それが答えだった。

魔性のモノにとつて、死別も転生も、絶対の別れではない。それは刀剣の付喪神である自分達もそうだ。化生ゆえ、神と呼ばれようと、本質は同じようなものだ。

俯く彼女の、顔がよく見えない。ホタルが呼応したように、彼女の顔から離れていった。泣いているのだろうか、そうとすら思えた。

「私はルシオラ。200年前に生まれて死んだ、ホタルの化身。姉妹がいて、世界を征服しようとして、その中で恋人と出会った。彼の為に、体すら譲った」

顔を手で覆う、その様は見えた。――膝の蛍丸は見えているだろうか。寝息が聞こえなかった。

「これらの事実は、周りから教えられたの。全部、全部」

主は静かに咽ぶ。

「ねえ、なんでそんな、大事な一生を欠片も覚えていない私が、200年前から私の事を想ってくれていた人達に期待を返せるのかな」

だから、会う義理がないと彼女はいう。

「あの人達は、私が今の私じゃなくて、200年前の名残を少しでも見せてくれる事を期

待してる。それを悪いとは思わない。私だって屹度期待する。でも、私は、本当に何も覚えてないの。どうやって探しても、目の前に突きつけられても、全然思い出せなかった。昨日見た夢の全てを思い出せないように。私を構成してきたものを思い出せない」  
不意に、顔を上げる。それに驚いて、見返した。審神者の顔を見た。

真つ新な顔だ。

「今の私は、もう『ルシオラ』じゃない。『横島●●』でしかない。同じ魂を持った赤の他人だ。どうすれば、あの人達に、この大事な事を伝えられるんだろう」

「……俺は、どんな主でも、お支えしたいと願っています」

「私も、あの人達に、そんな風にいえたらよかった」

濡れた足を引き揚げる。ホタルの灯りの中でも、審神者の脚は血色を保ったままだった。

「私は、私だって」

2199年 政府の一角

まるで覚えていないが、200年前。自身は前世とやらでこの人と話した事があると



いう。ダンピールだという彼は、漸く放してくれた両親に見送られる自身に、ひどく申し訳なきように語った。

「実は先日、貴女の恋人だった男性の幽霊……正確には残留思念ですね。彼と会ったんです」

「じゃあ、私が今からその人に会えば」

「残念ながら、彼らは成仏してしまいました。……この際は残念、というべきか」

「ちよつと見てみたかったなあ。実感がわかないし」

魂の検査をするという部屋。そこに連れて行かれながら、見下ろしてくる彼に、自身は答えた。

「命懸けの恋をした自分なんて、まだ想像がつかなくて。顔を見れば実感がわくかなって」

それに、彼は苦笑したまま、答えたなかった。

まだ、子供だった。吸血鬼の彼と比べれば赤子にも等しかった。

2205年 夏の夜

主は私室に引き取った。負ぶっていたその子供がいい加減重くなり、部屋に着く前に嘔く。

「おい、蛍丸。とつくに起きているんだろう。下りろ」

「……だつて気まずいじゃん」

返る答えは、背なの少年。審神者の近侍のものだ。悪びれない彼は、それでもしやがんだ自身から素直に下りる。そしてそのまま、自室へと向かう縁側を一緒に歩いていく。

起きているのはわかっていた。そもそも、自身が客人を相手にしていた時、傍についてやっていたのはこの蛍丸なのだ。同じホテルに纏わる者同士、奇妙な共鳴を示す彼らだ。

腰の位置にある頭を見下ろす。帽子を脱いで頭をかき回す彼は、欠伸混じりにいう。「主、ずーっと静かでき。いつもそうだけど、今日はより一層ひどかった気がする。もう関わらせない方が、主の心の安寧になると思う。どうせ、主の恋人だったつていうヒトは、結局まだ見つかってないんでしょ」

「200年前に死んだ主に対して、100年以上前に死んだ恋人だからな。生まれ変わりというものはわからんが、この時代にいるとは思えん」

「主つて、律儀なんだよね。無い袖は振れない。なのに一々応えようとするから、あんな

に憔悴しちやつてるんだ。心の手入れは難しいよ」

帽子を被り直し、蛍丸はいう。長谷部を斜めに見上げた。

「長谷部は、どう思う」

「……今の一番は、主だ」

「俺もだよ。昔の主の事も知らないし。……報われない話だよねって、主が自嘲してたよ」

語る声は、いつも通りに静かだった。あのホタルの舞のように。

「200年前に自分が死んだせいで、世界は救われたけど関係者は皆傷付いた。生まれ変わる可能性に賭けて心を慰めた。なのに何も持たずに生まれ変わってしまったから、自分は200年経っても誰の心も慰められない。ふがない奴だって」

声を詰まらせる。蛍丸は来派部屋を向こうに見ながらいった。

「主はここで今、保護されている。でも、今迎えているのは、また世界の危機とやらだ。主に変な事を考えさせないようにしないとね」

「変な事」

「『同じ事の繰り返し』」

世界を救う為に、自分の命を投げ出す。嘗ての彼女は、恋人の為に行った。しかし、今の彼女は。

「長谷部。そうならないように、ちゃんとお前も見守ってあげてね。昔は魔族とやらでも、今の主は人間だから」

「わかっている」

言い聞かせるように、長谷部は俯く。

「……わかっている。主は今生は、絶対に死なせない。お守りし通す」

刀の柄を握った。

「死なせない事が、主があれ程に気を病まれている『彼ら』への期待に応える事だろうか  
らな」

21×  
×年  
???

自身に、名はまだない。

……宿った魂には、深く名が刻まれている。しかし、これが自身の名に由来する事はあっても、同じ名を与えられる事はないだろう。

そして生まれた自分は、今知った、嘗ての数奇な運命を全てこの中に置き去っていくだろう。

それでいい。それでいいのだ。

自身がそのままに生まれれば、2000年。2000年も待っていた人達も、自分が覚えていなければ、きっといつか諦めて離れていく。

彼らが、解放されるだろうから。

そうしてまた、夢を見る。淡い淡い光を、その水の中で見る。

ホタルの夢だった。